

Title	見通し
Author(s)	大山, 忠司
Citation	大阪大学低温センターだより. 127 p1-p.1
Issue Date	2004-07
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12337">https://hdl.handle.net/11094/12337</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 一見通し

大山忠司

大阪大学には学生時代も含めると四十数年間在籍したことになります。「あっ」という間に過ぎ去った感が致します。その間、低温センターには四十年余りお世話になりました。液体ヘリウムや液体窒素の絡む思い出を辿っていくと、阪大における自分自身のその時々を歴史を振り返ることができます。初めて研究室に入った頃は液体ヘリウムといえば自分の血にも匹敵する感を持たされ、「一滴でも無駄にするな」という意識を徹底的に叩き込まれました。デュワーの真空テストにも随分と気を遣い、液化器からヘリウムを汲んでもらう際にはオペレータの眼前で真空テストを受ける必要がありました。シリコンオイルを使った簡単な真空計でしたが、1分間に10mm以上の漏れがあるとどんなに切迫した実験であってもその日は汲んでもらえませんでした。この時ほど1分間が長く感じられたことはありませんでした。

定年を迎え、少し自由な時間ができ、これまではあまり手に取る機会のなかった何冊かの本に目を通しました。最初の1冊はガブリエル・ウオーカー著の「スノーボール・アース」という科学読み物です。2冊目は吉田武著の「大人のための数学・物理再入門」、最後は邦光史郎著の「やってみなはれ」。全てを精読したわけではありませんが、それぞれに心に留まる一節がありました。

1冊目には数億年前の水に閉ざされた地球とその後発生する多細胞動物の出現の過程などを探索した、個性的な科学者の姿が生き活きと描き出され、科学者としての根性を改めて植え付けられる思いがしました。

2冊目には「超高速計算機がありさえすれば、人の知性は無用なのか。計算機は数値を吐き出しても、概念は創造してくれない・・・」という件があり、スマートに体系づけられた物理や数学にも随分と泥臭い歴史があることを今更ながら思い知らされた1冊です。

3冊目はとくに感銘を受け、共感を覚えるところが多くありました。サントリーを創始し、発展させた鳥居信治郎氏、佐治敬三氏親子それぞれの一代記です。信治郎氏の終生を通しての信条は「やってみなはれ」、二代目敬三氏のモットーは「やらせてみなはれ」でした。科学の研究は殆どの場合、やってみなければ真実が判かりません。理論・理屈による詳細な「見通し」も時には重要ですが、実験は徒に「見通し」ばかりに時間を費やすより、先ずは「やってみなはれ」。研究室の学生諸君にも常々訴えかけていた大好きな言葉です。また、この大阪弁としてのニュアンスが非常に心地好い。著者の後書によりますと、「やってみなはれ」を東京言葉で置き換えると「やっごらんよ」となる。これでは権威を喪失した父親の言い草であるし、「やってみなさい」などでは、教育ママか教師の口吻になってしまう・・・。」独立法人化によって益々競争が激しくなるなか、学生諸君や若い研究者の主体性を尊重し、活力を与える掛け声、「やってみなはれ」の精神に則て、大阪大学も更に大きく羽撃くことを熱望します。